

全国の平年反収発表とコメビジネスの動き

農水省より平成29年度産の全国平年反収ならびに各県の平年反収が発表された。作況指数が1.03と豊作であったからなのか、平均反収は532kgの1kg増となった。各県の地域ごとの平年反収は6月末頃を目途に発表される見通し。算出の基礎となる篩目幅は1.70mm。29年産は北海道、青森、岩手、宮城、福島、千葉、東京、新潟、富山、石川、長崎県が昨年よりも反収は引き上げ、長野、香川、福岡県は引下げとなった。作付前に平均反収を確定させる理由として、共済事業における反収の算定や米の需給調整における適正生産量の算定、作柄の良否を示す作況指数の基準として利用される事が挙げられる。各県の反収の増減は近年の栽培技術の進歩度合や作付変動等が考慮され、実習量の趨勢を基にして「水稻の作柄に関する委員会」によって作成される。また、1.7mm篩を基準としているものの地域によって篩目が異なるため地域の篩目基準（北海道・東北・北陸は1.85mm、関東・東山・東海・近畿・中国・九州は1.80mm、四国・沖縄は1.75mm篩）にて算出された反収も公表している。

全国平年反収日本一の都道府県は607kgの長野県だ。第2位は山形県の580kgと27kgもの差がついている。逆に平均反収ワースト一位は305kgで断トツの沖縄県。ブービーは404kgの東京都となっており生産者も乏しく行政としても水稻栽培に力を入れてないこと、気象条件も異なるため比較することはどうかという意見もあるが、同じ日本でも最高と最低の収量差がほぼ倍もの数字になっていることは驚きである。生産者の憧れとして西に行けば行くほど「畝どり」（反収600kgに相当）は高根の花として現場ではよく聞く話であるが、平均して畝どりを達成している都道府県はわずか長野県だけなのである。これは誠に残念でならない。最近の傾向として食味ランキングがクローズアップされ、またご当地ブランド米が流行のようで奇抜なネーミングで消費者の関心を寄せようとしている動きが目立つ。消費減に伴う高級路線化戦略なのだろうが、このエリアの需要は限定的で販売に苦労しているブランド米銘柄も少なくない。

一方でこのブランド米志向とは真反対の動きがある。中食や外食に利用されやすいいわゆるB銘柄の需要が供給量に追いついてないといったことだ。B銘柄自体の飼料用米への転換や一部ブランド米への移行がこの騒ぎの発端となっている。NHKのおほよう日本にて特集が組まれていたが、B銘柄の値上がり幅が大きくなったことからコンビニやスーパーで販売されているおにぎりが1個95gから90gに下げなければ利益につながらないとの声が放映されていた。また、ついに米国産の米の導入を大手中華チェーンや大手丼物チェーンが今秋以降の米価上昇を鑑みて国産米とのブレンドとして導入検討に入ったという。これでは国産米の消費減に拍車がかかり、ひいては生産者に跳ね返ってくる事につながりかねない。単年毎に一喜一憂せず、中期的なビジョンで生産者・行政・加工販売業者が連携して動く必要が来ている。その為には生産現場は供給量に追いついてない必要な銘柄の増収技術を携え水田をフル活用することに目を向けること、安定取引のためには加工業者側が複数年契約で生産者と提携することがますます必要となってくるものと期待したい。

平成29年産水稻の平年反収

都道府県	上位・下位 5位	
反収(kg)	1.70mm基準	地域使用篩目
全国	532	518
1位 長野県	619	607
2位 山形県	595	580
3位 青森県	589	573
4位 秋田県	573	556
5位 山梨県	547	533
43位 長崎県	480	463
44位 徳島県	474	469
45位 高知県	458	454
46位 東京都	414	404
47位 沖縄県	309	305

増える外来種

日本全国地域によって時期に差はあるものの日本の風物詩とも言える田植えが始まっている。早いところでは沖縄や九州で3月から田植えが始まるが全国的には5月のゴールデンウィークあたりが最盛期となる。幼少期は田んぼや用水路でドジョウやカブトエビ、ゲンゴロウといった魚や水生昆虫を取って遊んでいたが、近頃は全く見かけなくなってしまった。代わりに目にするのは関西や九州を中心に多く分布しジャンボタニシの呼名で知られているスクミリングガイだ。水田の湛水を終えるや否や越冬した比較的小さい個体がいつの間にか地中から這い出てきている。夏場には鮮やかなピンク色の卵を水辺の壁面や稲体に産み付けるので目にしたかたも多いと思う。このジャンボタニシだが、もともと日本には生息していない外来種で1981年に台湾から長崎県と和歌山県に養殖用として持ち込まれたが、需要が伸びず放置された養殖場から逸出し繁殖したと言われている。メスのほうがオスより大きく殻高は大きいもので80mmを超え、巻貝としては歩行速度が速く雑食性で動植物を問わず摂食する。ジャンボタニシと呼ばれているがタニシ科には属さない。産卵は水面から離れた場所で行い、産卵直後は卵1つ1つを結び付けている粘液が柔らかいが、やがて硬質化し付着箇所から剥離させるのが困難となる。

●スクミリングガイ

手のひらを覆うほどの大きさだが写真のサイズより大きい個体もいる。田んぼの水が無くなったり寒くなると土に潜り生き延びる。越冬するのは成体ではなく1~3cmの幼体が多い。寿命は環境により変化するが自然環境下では2年以内と言われている。

●スクミリングガイの卵塊

用水路の壁一面に卵塊が付着していることもしばしば。貝の卵でありながら空気中でしか孵化できず、水中に沈むと死んでしまう。

●スクミリングガイの食害

田植え直後の柔らかい稲を好んで食べるため、ひどい時は欠株となり収量の低下に繋がる。成長して硬くなった稲は食さないため、対策としては農薬もあるが田植え直後は水を張らずに株元が固くなるまで最低限の湛水で抑える方法もある。後者の方法は柔らかい葉のみを食すスクミリングガイの特徴を利用し除草剤を使用しない手段としても活用されているが、均平な代掻き技術とまめな水管理が必要となる。

《その他の外来種》

スクミリングガイと同じくもともとは養殖用として日本に持ち込まれたが食用とされず野生化し繁殖した外来種。

●アメリカザリガニ

水田では畦に穴を開け、イネの根を食い荒らすことも。

●アフリカマイマイ

世界最大級の陸生巻貝で殻高20cm程になる個体もいる。1932年に食用として沖縄県に移入され、現在では沖縄県、奄美群島、小笠原諸島の各島が主たる生息地となっている。そ菜類を食べる農業被害から駆除の対象となっている。



桜の満開まで時間がかかったかと思えば、一気に初夏の様な陽気にもなりました。気温の差が激しい日がありますので、体調管理には十分ご留意ください。

編集事務局：南部、助川

電話：03-5275-5511/E-mail：macjournal@mcagri.co.jp URL <http://www.mcagri.jp>